

【文部科学大臣賞：小学生の部】

「差別のない世の中へ」

長崎県・大村市立三浦小学校
5年 高橋 京加 さん

私には、障がいのあるお姉ちゃんがあります。私が生まれた時から障がいのあるお姉ちゃんがいるのが当たり前でした。さらに、お姉ちゃんが特別支援学校に行っていたので私は、小さい頃、障がいのある人たちと毎日を過ごすのが当然でした。だから、私にとって、障がいのある人は、とても身近な存在でした。

お姉ちゃんは、身体が不自由です。

「お母さんのおなかの中で、生まれる前に、おなかの中でまくが破れて、脳に酸素がいなくなってしまうと、それで障がいが残ったんだよ。」

とお母さんから聞きました。お姉ちゃんは、しゃべることも自分で歩いたりすることもできません。ですが、お姉ちゃんにもできることがあります。お姉ちゃんが、特別支援学校に行っていた時に、先生がお姉ちゃんに話かけると、反応して笑ってみたり、少し声をあげたりと、表情や返事などで感情を表したりすることができます。周りの人たちから声をかけてもらっても、言葉を返すということはいませんが、みんなが、お姉ちゃんに話かけてくれていました。私が話かけても、同じように、笑ったり、声をあげたりしてくれます。

お姉ちゃんはもう、学校を卒業して、今はデイサービスに行っています。家では、お母さんが、お姉ちゃんの介護をしますが、お母さんは、仕事をしながら家事もしなければなりません。だから、デイサービスだけでなく、ヘルパーさんたちに、お姉ちゃんをお風呂に入れてもらったり、飲み物を飲ませてもらったりもしています。私も何かできることはないかなと思って、一回だけ、お姉ちゃんにごはんを食べさせてみました。だけど、口から何回も出して、なかなか食べてくれなくて、とても苦勞をしました。

私は、時々「お姉ちゃんは今、何を思っているのだろう。」と思う時があります。お姉ちゃんが泣いていても、何を思っているのか、今私に何をしてほしいのか、わからないので、接し方が難しい時があります。お姉ちゃんもみんなに、どう伝えればいいのかわからなくて、みんなにもわかってもらえなくて、しゃべれたらいいのにと悔しがっている時があると思います。

お姉ちゃんのように、障がいのある人たちの中には、自分の思っていることが伝えられなくて、差別をされる人がいます。差別をしている人は、その人のこと

を知らないから、差別をしているんだと思います。相手のいいところを知り、何かができるから、その人はすごいとか、できないからその人はだめだとかいう、この考えをなくせば、差別はなくなっていくんじゃないかなと、私は思います。